

編集後記

寛容であることが、学問の進歩にどう影響を及ぼすのかとの問いに対し一律の形で答えるとなるとはなはだ難しいことに気付く。対象（個人）によってその答えは異なるはずであり、一律の答えはないというのが正しい結論であろう。感受性の不十分な対象に寛容でありすぎると、結果として生じる事態が低い評価となってしまふことは明白である。

さて、論文査読の経験から考えさせられることがある。昨今では論文の内容そのものを主に重視したいとお考えもあつてか、表現・記載に十分な配慮を欠く投稿論文が少なくない。その原因については、十分な指導が成されていないことに起因している。指導者が多忙ゆえの結果であることについては、論文の整理に関わる人々の間で“あ・うん”の呼吸があるが如く了解されてしまっている。現在の投稿方法では結果として、だれによる指導を経て投稿されてきたのかが明確にされないこととなる。日本では、一般に、教育に十分な資金を導入せず、ボランティア精神と根性や努力主義に依存しようとの習慣・傾向があり、日本の教育は幸いにもこれに支えられてきた。どのような社会になろうとも確かにボランティア精神は貴重で最も敬意を払うべき行為のひとつであるが、それを育む環境と適切な評価システムなくして健全な組織の維持は考えられない。知性を誇る集団においては、そのレベルが高いほど、指導者への依存を最小限にとどめるべく各個人の努力が成されている。個々の小集団の指導責任体制が厳しさのある相互評価によって動いていると想定される。

投稿論文は公表文書と位置づけられる。個人情報管理の徹底化が叫ばれている今日、発信元での厳重チェックが何よりも大切で、その後には査読者の学術文章としての仕上げに努力が加わるものである。

外科的实力がすばらしくとも、学術論文執筆については不慣れな方がおられることは当然なことである。そこで最近好評な学生教育用の e-learning システムを論文執筆指導に導入することを考えてみた。e-learning システムは一定の特定化した条件下にある人々を教育するために IT を駆使した教育上のツールである。「global standarization」を目的とした「order made education」の確立を目指したものであり、またより客観性の高い自己評価によって個人の能力アップを図ろうとしたものである。しかし、e-learning では、指導者には時間外でのパソコン画面を介しての教育としての負担増が強いられる。結局は、一層負担が増すかもしれない。いずれにせよ今後は、著者、なかでも共著者として指導者の教育責任が一層重視されよう。今回の査読結果を拝見し、初回投稿時原稿と最終仕上がり原稿の記載内容を比較し、投稿前の努力の貧困性に気付くと啞然としていただけの著者もいるであろうと考える。論文としての完成については、祝福の言を送りたいが、著者においては、何らかの思いを感じていただければ幸いである。